

体験的・問題解決的な学習を楽しみながら考える子を育てる

社会科 泊 和寿

1 社会科における「考える子」

小学校社会科の目標は、公民的資質の基礎を養うことである。そのために、社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てるのである。

社会生活については、生活経験や体験的な活動などを生かして社会の在り様を見つめ、つかんだ事実を比較・関連付け・統合するなどして活用しながら、社会生活についての理解を深め、自らも社会生活に適応すると共に地域社会や国家の発展に貢献しようとする子をめざす。

我が国の国土と歴史に対する理解と愛情については、社会生活と同様に、地域社会や我が国の国土の地理的環境、産業の様子及び先人の働きになどについて学ぶことを通して深める子をめざす。

社会的な見方や考え方を養うとともに、体験的・問題解決的な学習を一層重視しながら、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培いたい。よりよい社会の形成に参画するには、問題解決への意欲を高め、多角的なものの見方・考え方を養う、考えることが重要なのである。

よって、社会科における「考える子」を次のようにとらえる。

体験的・問題解決的な学習を通して 問題解決への意欲を高め 多角的なものの見方・考え方を養いながら 地域社会や我が国の国土・産業・歴史などに対する理解と愛情を育み よりよい社会の形成に参画しようとする子

2 問いがつながる社会科の授業

社会科における「問い」とは、問題解決への意欲と考える。すなわち、問いがつながる授業とは、子どもの問題解決意欲が継続している授業のことである。まずは、教材との出会いにおいて問題解決への意欲をもつこと。そして、観察・調査活動などの体験的な学習を生かして社会の様子をつかむこと。問題解決に向けて多角的なものの見方や考え方を比較・関連付け・統合しながら、地域社会や我が国の国土・産業・歴史への理解と愛情を育み、よりよい社会づくりに参画する意欲が育つこと。学ぶことを楽しみながら公民的資質の基礎を養っていきたい。

3 「問いがつながる授業」への手立て

(1) 体験的・問題解決的な学習を大切にす

体験的な学習によって実感を伴う思考が行われ、問題解決への意欲が高まるにつれて多角的なものの見方・考え方が行われつつ、問題解決への意欲が継続する。

(2) 学習の共通土台を整える

共通の体験や活動や資料などを使って、共に考える土台を整えることで、多角的なものの見方や考え方を引き出し育てるとともに、共に問題解決しようという意欲が継続する。

(3) 学んだことの価値を認識させる

学んだことの価値について、児童に考えさせたり、教師が価値づけたりして、自分達が学んだことの価値を認識させることは、新たな問題解決への意欲につながる。

(4) 学びを生かしてチャレンジする

獲得した学びを生かして、チャレンジすることで、多角的なものの見方や考え方を引き出し育てるとともに、強い問題解決への意欲を引き出す。

4 実践例

ここでは、単元「わたしたちの学校のまわりのようす」の研究授業に絞って考察する（以下「本時」）。研究の実際について、より詳細で確かな記録と考察を残すためである。単元と本時の計画は以下の通りである（資料1）。

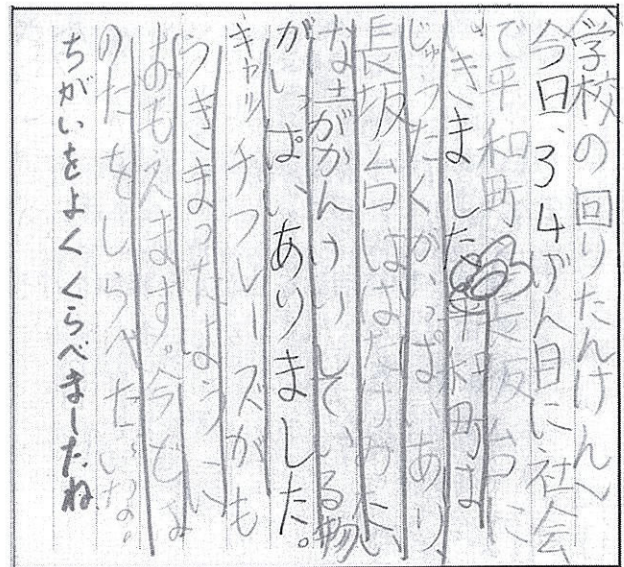
単元計画 (15時間)		5 本時の学習 (第二次中8時)	
主な活動と内容	問いがつながるための手立て	学習活動と子どもの姿	問いがつながるための手立て
1 第一次の活動 (2時間) ○自分の家の周りのお気に入りの場所を描く ○自分の家の周りのお気に入りの場所を紹介し、町の様子を観察・調査する視点をつかむ	(3)比較、関連付け、検証させる それぞれのお気に入りの場所を比べて仲間を分けし、今後の学びに活用していく見通しと意欲をもたせる。	5. 1. 本時の見通しをもつ <野田地区のキャッチフレーズをつくろう> ○どんなのになると思う？ 10. 2. 観察・調査結果をまとめる ○見つけたものを報告しよう ○野田地区の特徴は？ 20. 3. キャッチフレーズをつくる ○自分の考えをまとめて書きましよう ○話し合い、まとめよう 8. 4. 学びを分かち合う ○学びのふりかえりを書く ○学びを分かち合う。	(1)学習の共通土台を整える ○ (2)根拠のある考えをもち、表現させる ○ (3)比較、関連付け、検証させる
2 第二次の活動 (9時間) ○学校のまわりの調査活動Ⅰ(平和町・長坂台地区) ○白地図作り ○キャッチフレーズ作り ○学校のまわりの調査活動Ⅱ(野田・大桑地区) ○白地図作り ○キャッチフレーズ作り (本時)	(1)学習の共通土台を整える 学校のまわりを観察・調査してワークシートに記録させる。 (2)根拠のある考えをもち、表現させる 観察・調査した結果をもとに、該当地区のキャッチフレーズを話し合っつくらせる。 (3)比較、関連付け、検証させる 観察・調査した結果について考えたことを話し合ったり検証したりする。	野田地区のキャッチフレーズをつくることできたよ。四つの地区は、となりどうしなのに、なぜ様子が違うのかな？ 2. 5. 次時の予告 ○次の時間は、地区によって特徴が違うのはなぜか考えよう。	(1)学習の共通土台を整える (2)根拠のある考えをもち、表現させる (3)比較、関連付け、検証させる
3 第三次の活動 (4時間) ○各地区の周りの様子が異なる理由を考える ○学校のまわりの調査活動(野田地区) ○学校のまわりの様子をまとめ、次単元を想起する	(4)価値づける(させる) 5つの視点を通して学校のまわりの様子を調べた時に見えてきたことをまとめさせる。		

資料1 単元・本時計画

「本時の学習」については、主な学習活動が分かるように簡易版にした。また、注目すべきは、本時案内の「問いがつながるための手立て」の(2)と(3)が、本実践記録の項目から変更されている点だ。これは、一学期の研究実践を積み重ねるうちに、変更されたことによる。旧手立ての観点からの実践考察は、紙面等の都合でこれを省いた。理由は言うまでもない。新手立ては本実践内でも行われており、より価値がある研究につながるからである。

(1) 体験的・問題解決的な活動を大切にす

体験的な活動をすることによって、一人一人が実感をともなった学習をすることができる。社会科は、自分を取り巻く社会についての学習である。「百聞は一見に如かず」、社会科の学習を始めたばかりの3年生にとって、五感を使つての自分を取り巻く社会の様子を見つめ、実感を伴った観察・調査活動は、とても楽しく、豊かな学びに溢れている。よって、問題解決への意欲を継続させるにも大変有効である(資料2)。社会科を学ぶにあたって、体験活動を伴った学びは、より良き社会生活を営む市民としての資質を養うことにつながる重要な活動である。自分の目で確かめて考え・判断し・行動する態度は、より良き社会づくりに参画する者にとって不可欠な態度である。また、フットワークを使った学びがより良い成果を生むことは、スポーツ科学的にも証明されている。



資料2 体験活動当日の日記

問題解決的な活動を大切にすることとは、問題解決的な学習問題を掲げるという事では

ない。学習問題は探究的な学びへの意欲の発端に過ぎない。問題解決的な学習展開がなければ、問いはつながっていかない。学習の過程で、明確になったことは何か、次に解決せねばならないことは何なのかを、確認することが、問題解決への意欲の継続を促すので大切にしたいということだ。

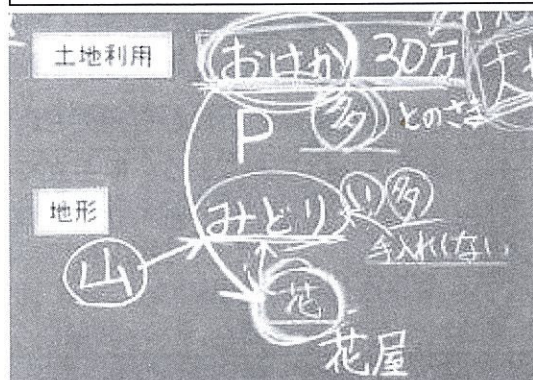
問題解決的な活動は、目的地へ向かって旅をするときに地図等で現在位置を確かめながら進むかのように探究的な学習の歩みをめざしたい。

【本時の実際を考察する】

① 「みどり」が多い理由の予想が三つに集約される

野田地区にみどりが多い理由について子どもたちの予想が次々に出された。板書にキーワードで記載・関連付けしていくうちに、次の三つの予想に集約されることが見えてきた。ここで子どもが言う「みどり」とは、雑木林のことである。三つの意見を以下に挙げる。

- (ア)「山だから」：山には元々草や木が多いから、「みどり」が多い。
(イ)「手入れをしないから」：墓の手入れをおこたっているから、「みどり」が多い。
(ウ)「花を育てるために」：墓参りに必要な花が育つように「みどり」が多い。



資料3 本時の板書より

三つ目の「供える花が育つため」というのは、自分が墓参りをした時の経験知に基づいたものであろう。自分達が出した意見を議論の最中に改めて分類する経験はまだなく、やや板書のインパクトも弱かったので、教師が三点に集約されることを押えた(資料3)。3年生の一学期の段階では、分類する思考よりも社会科における問題解決的な学習の良さを味わわせることの方が大切であるので、必要感のある指導であったと考える。

育てたい予想が三つに分かれたことで、次の三つのうち、どの考えが妥当なのかははっきりさせるための議論が続けられていったことから、問題解決への意欲は継続され問いが繋がっていったと考える。

② 観察・調査活動を生かした議論を行う

野田山墓地に「みどり」が多い理由について考えている時のことだ。探検の時に、花屋が何軒もあったことを思い出し、野田山へ墓参りには、多くの人が買った花を供えると考えるのが妥当ではないかという意見が出た。これは、探検時に、実際に花屋が何軒も並んでいる様子を観察し、「なぜ、この道に花屋が並んでいるのか。」と、子どもに疑問を投げかけておいた布石が効を奏した。

③ 予想を統合し、考えが変化していく

実際に体験的な活動を行ったからこそ実感を伴う長期記憶として残り、粘り強く議論がなされるうちに、「山は、元々みどりが多い。そこに墓を作った。墓は、手入れした方がいい。だが、十分に手入れができていない。なぜだ？山には傾斜があり、木々が乱立している…手入れがしにくいのではないか。」という意見が出された。

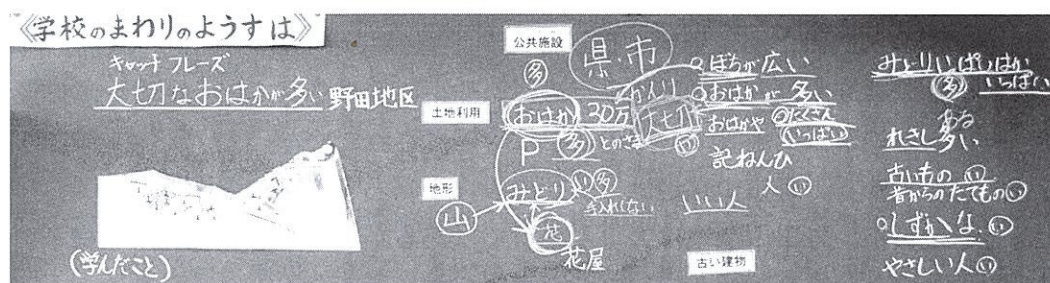
一見違う意見を、事実を思い返しながらか、じっくりと比較して考えたからこそ、出た意見である。どっちの意見も一理ありそうだという判断が考えを深めさせた。お墓は大事ではないのか？年に一回くらい行くだけ…。「なぜ、みどりが多いのか？」から、「墓地は大事な場所ではないのか？みどりだらけになっているとは、手入れをしていないの？」と、じっくりと考えを変化させていったのだ。

議論の中で、地形と観察・調査活動という経験知を関係づけ、予想を統合して新たな考えを生み出すことができたのは、実感を伴う体験的な活動があったからである。

毎回、学習問題について全員が予想をもち多様な考えが出されたのは、体験的な学習の効果によるところが大きい。多様な考えの表出は、話し合いたい必要感を生み、盛んな意見交換にもつながった。また、探検をして学習すると問題が解決するという繰り返しのよ、子どもは、体験的な学習の良さを実感していった。

毎回の探検時に、「これから調査する地区はどんな様子だろう。前の地区と違うところはどこかな？」という問題意識をもって3回に分けて校区探検を行ったことは、単元内で小さな問題解決的な学習を反復するという事である。学習が進むにつれて、次に探検する地区の様子はどんなだろうという期待感と共に、問題解決への意欲が継続していった(資料4)。

また、体験的・問題解決的な活動を大切にすることは、問題解決への意欲を高め、多角的なものの方・考え方を養うことに有効であった。



資料4 板書全体

(2) 学習の共通土台を整える

社会科に出会ったばかりの3年生にとって、五つの観点を意識して観察・調査活動することは簡単ではない。そこで、探検時には随所で子どもを集めて、「この土地利用の様子はどうか？」など、観点を意識させての観察を促した。観察・調査活動が大切な学習の共通土台になるからである。

学習の共通土台は、本時以前に整えられたものと本時に整えるものがある。どちらも問いをつなぐには欠かせない。

本時以前では、「問題意識・学習課題」、「観察・調査活動」、「白地図作業」、「キャッチフレーズの予想」がそれにあたる。

本時では主なものとして次のものが挙げられる。「共通の学習問題」、「学習問題に対する全員の考え」、共通の資料として、「野田地区の地図」、「学校の周りの観察・調査活動と探検メモ」、「野田墓地由来記」や「墓地の草刈りをする人々」などである(同 資料4)。

【本時の実際を考察する】

① 全員が考えを発表する

学習前の自分とクラス全体の考えの傾向を把握。全員が同じ学習の土俵に立って考えるこ

とができるように。全員参加。子ども全員の思考の現状を、教師も子どもも相互把握できてよかった。このことから、全員の考えを出し合って学習する習慣が定着するようにしたいと考えている。

② 議論が煮詰まったら、別の観点から考え直す

野田山墓地に「みどり」が多い理由について議論している時、子どもの語る根拠は、「地形」と「土地利用」の二観点に絞られていた。「交通」「古くからの建物」「主な公共施設」の三観点を根拠にした思考はなかった。

それは、「外側環状道路という交通量の多い道路が走っていること（交通）」や「お寺や神社、前田利家の一族のお墓があること（古くからの建物）」は、みどりが多い理由にはつながらないと思われたし、「主な公共施設」は存在しない（子どもの考えでは）と考えていたからではないかと推察する。

子どもは二つの観点を根拠にして議論を重ねていた。しかし、議論が煮詰まって答えがなくなかった。問題意識も「なぜ、みどりが多いのか？」から、「墓地は大事な場所ではないのか？みどりだらけになっているとは、手入れをしていないのか？」と変化してきた。

問題解決に行き詰まったら、学習の共通土台を整えることが大事だ。新たな観点を土台にして考えることで煮詰まった議論を打開することができる。だから、議論を一旦止めた。問題意識が変化していること、しかも議論に決着がつかずに行き詰っていることを確認した。そして、問題解決のために資料を提示した。学習の共通土台を補強する教師の出場である。

まずは、公共施設はみんなが使うために県や市に管理されている所という確認をした。次に、野田山墓地が公共施設でないのならば管理はされていないし、公共施設ならば管理されているはずである。野田山墓地は、公共施設なのだろうか？…と問うた。

子ども全員が、野田山墓地は大事な場所ではあるが、単なる土地利用の様子であり、公共施設ではないという判断をしていたことが明らかになった。

3年生になったばかりの子どもは、「公共施設」について、ほとんど知らない。「みんなが使う所」くらいの認識はあるが、「みんなが使いやすいように人々が管理している」などという認識は薄い。そこで、「手入れをしているのか？いないのか？」と、議論が一通り交わし終わった時点で、「よし、ここだ！墓地の除草をしている写真を使って、子どもの公共施設への認識を深めよう。」と考えた。

現在獲得している学びを生かして、子どもが、学びの達成感を最も味わえる展開にしたいと考えた。子どもが野田山についてもっている、「土地利用の様子として、お墓が多かった場所。」という認識を、「市民の多くが利用し、県や市が管理している大切な場所。」という認識に変えるチャンスだった。新たな資料が、子どもの予想を覆し、想定外の発見をさせるだけでなく問題解決へと至らせる、絶好のチャンスであった。

社会科では自分の考えと観察・調査してきた事実を比較して検証するときには、子どもがこだわって議論するであろうと予想されるいくつかのポイントを授業者は予測し、どんな展開にも柔軟に対応できる様々な資料を用意しておくことが望ましいと考えている。だから、どんな展開にも対応できるように、十数枚の画像と二本の動画を用意していた。本時では、そのうち一枚の画像を使用し、墓地は管理されているのかどうかの検証材料とした。

③ 手持ち資料「野田山墓地の由来」を読む

右の資料は、「墓地に最適の地であること」、「30万以上の墓がある市民にとって大切な場所」「県と市が管理されている市街地隣接型の国際的な墓地」の三つの事実をつかませるために、子ども全員に配布した（資料5）。

資料の全員配布にした理由は、しっかりと資料を読ませたかったからである。一人一人の手に持たせて、資料と自分の距離感を縮め、全員をどっぷりと思考の世界に漬からせたかった。なので、資料を全員配布にした。後でノートに貼らせたいという思いもあった。

資料を、子どもに難しい原文のまま載せたのはなぜか。これは体験的な活動の良さにあたる部分であるが、あまり詳細に分割して考察すると分かりにくくなるので、ここで合わせて考察する。

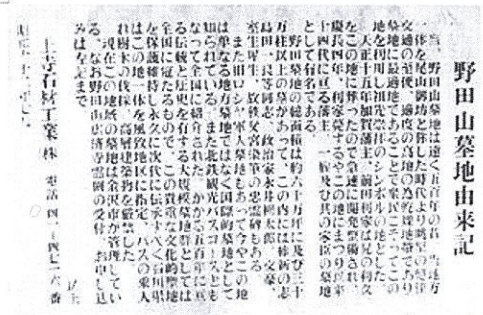
それは、なるべく実物のまま出会わせたいという思いがあったからだ。教室に立て看板を持ってくるわけにはいかないが、写真としてならば見せることができる。

それに、今回は、授業者が取り上げた資料であるので、本時では、授業者が分かりやすく簡潔に子どもに伝えることができる。受け売りの資料では、それは難しい。

もう一つの理由は、子どもが理解し易い資料に加工して渡すこともできるが、そんな手間は毎回かけられない。毎回できないということは、汎用性が低い指導方法であるということだ。どうせなら、研究授業だから作れた資料ではなく、これからの学びにも生きる指導方法が良い。だから、「野田山墓地由来記」は、そのまま使った。

まとめると、何でも簡単にすれば、よい学びになるとは限らない。柔らかい物ばかり食べていると、歯や歯茎が弱くなるのと同じである。3年生だからと言って、咀嚼した資料ばかり与えては、実物への抵抗感を育てることにもつながる。だから、なるべく実物に出会わせ、少々難しい資料や事実であっても、教師の助けをこっそりと借りながらも、自分達で学びを深めていける習慣をつけることが大切なのだ。否、3年生だからこそ、できる限り実物主義で行くべきだ。本当ならば、看板の前で授業をしたいくらいだ。社会科を学び始めた早期に、どのような学び方を習慣づけるかは、考慮せねばならぬ大切なポイントである。ちなみに、人間の子どもは、歯固めといって、0歳で歯が一本も生えていないときから、物を噛んで、歯と歯茎を鍛えようとする。これと同じく、社会科の資料についても早期から過保護にしないことが大切である。

加工してもしなくてもよい資料を加工している時間があつたら、本時の展開をできる限り、シミュレーションしておくことに時間を費やしたい。



- ①野田墓地は（ ）年前からある。+
- ②わけは、（ ）と（ ）がいいから。+
- ③お墓が（ ）以上ある貴重な文化的聖地。+
- ④伝え残していくために、（ ）や（ ）が管理している。+



資料5 本時に配布した資料

④ 画像資料「墓地の草刈りをする人たち」を読みとらせる

資料5をもとに、野田墓地は県や市が管理していることに行き着く。そこで、「管理ってどんなことしているのか、見せてあげる。」と言ってから、画像資料「墓地の草刈りをする



人たち」(資料6)を黙って見せた。子どもたち、しばらく沈黙、そして注目。そして、つぶやき出す。

子どもが、資料を読みとり、思考し始めるには、少し時間が必要だ。ほんのわずかな時間だけ、静かにじっくりと待つ。合わせて、全体思考を促すためには、教師が子どもの思考に乗って呟くことも効果的だ。

資料6 墓地の草刈りをする人々

子どもは、問題意識をもっていれば、資料を見るだけで、新たな事実と既習を繋げて、自然と思考を巡らせ始める(資料7)。

T (資料6を見せる)

C1 : あっ!

T : …何してる?

C1 : 草刈り。

T : 草刈りやね…。

C2 : …手入れしてる? C3 : 手入れしてる! C4 : 手入れしてた!

資料7 授業記録より

この後、墓地の草刈りをして手入れをしているのは、お墓を大切にしているからだという意見が出る。資料6からは、市が管理をしている墓地であるという事実と「管理」とはどういうことをしていることなのかという具体をつかむことができた。

そして、山全体が墓地で、広くてもしっかりと手入れをしていたという事は、市民が大切に思っているからではないかという思考につながっていった。

複数の共通土台を組み合わせたりつないだりすることで、共に事実や考えを共通理解しながら問題解決をしていこうとする意欲ある議論が続いた。

(3) 学んだことの価値を認識する

学習活動に際して、学んだことの価値を認識する場面は実に多い。それは、「学びの達成感」などの言葉で表現され、1時間の授業の最後において「まとめ」などの活動として位置づけられることが多い。しかし、学んだことの価値を認識するのは授業の最後だけでよいのであろうか。それは違う。1時間の授業には、たくさんの学びがある。学んだことの価値を認識させる頻度が上がると、自らの学習活動が問題解決へと前進していることを実感でき、問題解決への意欲が継続するだけでなく高まることにもつながる。これは、社会科に限らず、全ての教科に通じる。以下に、本時で学んだことの価値を認識させた主な場面を挙げる。

(a)探検に行つて実物を見たから、学習問題に対して自分の考えをもつことができた。

(b)全員がしっかりと自分の考えをもったから、全員の考えを聴くことができた。

(c)白地図作業をしたから、地区の様子をつかめた。

(d)前時に他地区のキャッチフレーズ作りをしたから、本時も学習をイメージできた。

- (e)大きな白地図を作ったり探検の記録を取っておいたりしたから、キャッチフレーズが妥当かどうかを検証できた。
- (f)根拠を述べたから、考え方の違いが明確になる。異なる考え方が出たから、議論をしたくなった。
- (g)議論をしたから、結論に近づき問題意識が変わってきた。
- (h)問題意識が変わったから論点が変わった。
- (i)論点が変わったから新しい検証資料が必要となった。
- (j)資料をじっくりと読み込んだから、検証ができた。
- (k)検証が終わると他の事に目が向くようになったから、新たな問題意識が生まれた。
- (l)共に考えたから、学びの達成感を共有することができた。

等である。

これらは、子どもが自ら認識しながら学習を進めることが望ましいが、学んだことの価値は実に多様であり、子ども自らが気づかない場合も多い。子どもが価値を認識しているかどうか、価値を認識した場合の教育的効果を鑑みながら、教師が直接価値付け、または間接的に気付かせるなどして指導することが望ましい。

【本時の実際を考察する】

① 野田地区の様子について、五つの観点から振り返る

社会的なものの見方・考え方を育てるために、五つの視点、「地形」、「土地利用」、「公共施設」、「古くからの建物」、「交通の様子」を意識して、野田地区に多く見られた特徴を挙げさせた。

子どもから出された意見からは、「土地利用」と「地形」への着眼が多いことが伺えた。

探検時には、記念碑を六つ、寺と神社を二つ発見している。これは、他の地区に比べて古くからの建物が目立ったからなのだが、子どもは本時の現時点では着目していなかった。これは、調査時に数が多かった「お墓」や「墓石屋」や「花屋」が印象に残ったためであろう。

「みどりが多い」は、五つの観点に当てはめにくい言葉であるが、無理に言葉を変化させて当てはめて授業を進めると、子どもの認識とずれが生じる場合があるのでそのまま使って、子どもの認識を生かしたまま学習を進め、機を見て生かしていく方がよいと判断した。

自分達の観察・調査してきたことについて、改めて観点に当てはめて再確認することで、十分な調査結果が得られている部分とそうでない部分が明らかになり、自分達の観察・調査活動について価値を認識するとともに、問題解決のために他の視点から迫りたいとの意識につながることができた。

学んだことの価値について、随時、子どもに考えさせたり、教師が価値づけたりして、自分達が学んだことの価値を認識させることで、新たな問題解決への意欲につながった。考えさせるまでしなくとも、意識させたり、教師自身が現在の学びの価値を把握したりしながら学習を進めるだけでも効果があると感じた。学んだことの価値を認識することを積み重ねていくと、子ども自ら学びの価値に気づいたり実感しながら学習を進めたりできるようになってくる。子どもが学びの価値を実感している場合は、敢えて教師が価値づけをする必要がな

い。ただし、本時のように、新たな資料を読みとることにより、社会事象への認識を深めるなど新しい価値の獲得をした際には、必ず価値づけをすることが大切になる。

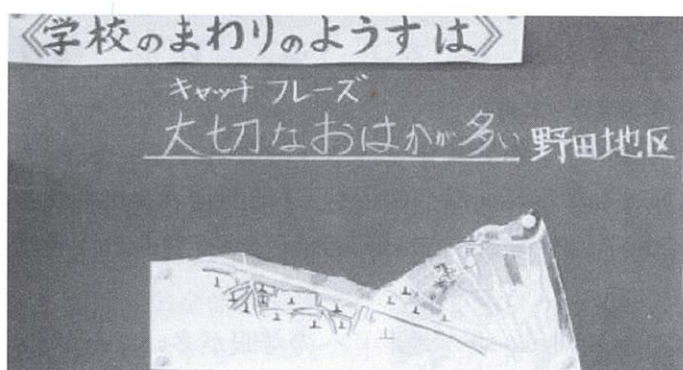
(4) 学びを生かしてチャレンジする

新しい学びがあるから、授業をする値打ちがある。反復学習のよさも大切にしますが、毎時間、新たな学びを獲得していくことが、子どもの学ぶ喜びにつながる。前時とは展開を変化させたり、プラスアルファの活動に挑戦したりして、新たな学びを獲得し続けることが大切である。本来、学びとは新たな知識・技能・価値の獲得であり、子どもの向上心を継続して引き出すには、学習活動に付加価値をつけることが欠かせない。チャレンジの無い学習活動が子どもの問題解決意欲と主体的な学びの意欲に火をつけることはない。

【本時の実際から考察する】

① 自分達の考えたキャッチフレーズが妥当か、野田地区の様子を振り返る（白地図・探検メモ）

前時では、平和町地区と長坂台地区を比較しながら、それぞれの違いや特徴をあげてキャッチフレーズを作った。白地図や探検メモからもった考えを交わし合い、より妥当なキャッチフレーズへと、それぞれの考えについて取捨選択・統合する話し合いを目指した。既習を活かした新たな学習活動へのチャレンジである。



資料8 本時の板書

本時では、それぞれに出されたキャッチフレーズが観察・調査の結果と照らして、妥当かどうかを話し合った。目的は前時と同じ「〇〇地区のキャッチフレーズをつくろう」であったが、調査してきた野田地区の様子について考え直すことを通して、自分の考えを練り直し、前時とは異なる思考ができる学習活動にしたのだ（資料8）。

学びを生かしてチャレンジするとは、研究当初は、発展学習のように単元を通して培った知識・技能・学習スキルなどの学びを生かして、新たな問題解決にチャレンジする学習をイメージしていた。もちろん、単元学習で自信をつけた子どもにとって、獲得したばかりの学びを使って全力でチャレンジできる学習は楽しいことこの上ないので、問題解決への強い意欲と引き出し継続させることにつながる。

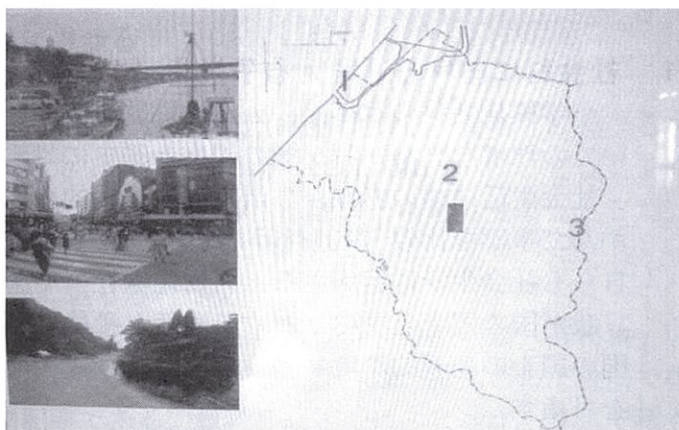
だが、一学期の実践に取り組むことを通して、私の意識が変わってきた。学びを生かしてチャレンジするとは、普段の何気ない1時間1時間の中に、そのチャンスがあるということに気が付いた。気が付いてみれば、当たり前のことである。だが、普段の授業で、爆発的な問題解決への意欲を引き出し、かつ継続させる授業をできているだろうかと考える。

本時では、生かす学びは「野田地区の白地図」と「探検メモ」であった。チャレンジする内容は、「自分達の考えたキャッチフレーズが適切かどうか、前時までの学びを生かして検証する」ということになる。配布資料の読みとりも画像資料の提示も、本時における新たなチャレンジであったので、本時ではかなりのスモールチャレンジをしていたことになる。

このように、次々と小さくも確かなチャレンジを積み重ねたことで、授業の実際でも紹介したように、子どもの多角的なものの見方や考え方を引き出し育てるとともに、強い問題解

決への意欲を引き出すことができた。

発展学習という訳ではないが、「学校のまわりの様子」の学びを生かして、次単元の「市の様子」の学習につなげたこともチャレンジであった。市の白地図に学校のまわりの地図を位置づけて市内の様子について予想したことで、「学校のまわりの様子は分かった。金沢市内には、さらに異なる様子が見られるに違いない。早く観察・調査に行きたい!」、と(資料9)。



資料9 大型スクリーンに市の白地図を映して様子を予想する

単元の最後に発展学習をするのは大変に効果的であるが、前単元の学びを生かして次単元につなげてチャレンジしようとすることで、強い問題意識を引き出し継続させることができた。

5 今後に向けて

一学期の実践では、問いがつながる授業への手立てとして、三つの仮説を立てて実践研究に取り組んできた。「学習の共通土台を整える」と、「根拠のある考えをもち、表現させる」と、「比較、関連付け、検証させる」である。しかし、7月には、「学習の共通土台を整える」を残して他の二つを解消し、「体験的・問題解決的な活動を大切にする」と「学んだことの値打ちを認識する」と「学びを生かしてチャレンジする」の三つを新たに追加して研究を進めていく。以下に理由を挙げる。

「根拠のある考えをもち、表現させる」と「比較、関連付け、検証させる」は、当初は社会的なものの見方・考え方を養う意図をもった手立てとして挙げたのであった。しかし、言語活動を充実させることの成果と大切さについては、すでに、多くの学校による研究実践によって明らかになっているし、教科の特性を生かした思考・判断・表現への指導は、どの教科でも日常的に大切にされているところである。社会科の教科の特性と良さを生かして、問いがつながる授業を実現する強い推進力として挙げるには弱いと判断したのだ。

「体験的・問題解決的な活動を大切にする」については、昨年12月の初等教育資料でも、その重要性について取り上げられているところである。「学んだことの価値を認識する」については、時間単位よりも小さなステップで指導と評価を的確に行うことが確かな成果につながっていると実感したからである。「学びを生かしてチャレンジする」ことは問題解決への強い意欲を引き出すのみならず、主体者をいかに育てるといふ、今日的課題への突破口になる手立てであると実感したからだ。

実践記録にあるように、一学期の実践は、問いがつながる授業への手立てについて、新たな発見や見直しと改善をできたことが大きな成果であった。と、同時に新たな手立てに重点を置いた実践研究をしていくことで、本校の研究にどのような成果が得られ、社会科の目標にせまれる授業の質を高められるかを課題としていきたい。

1 社会科における「考える子」

小学校社会科の目標は、公民的資質の基礎を養うことである。そのために、社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てるのである。

社会生活については、生活経験や体験的な活動などを生かして社会の在り様を見つけ、つかんだ事実を比較・関連付け・統合するなど活用しながら、社会生活についての理解を深め、自らも社会生活に適応すると共に地域社会や国家の発展に貢献しようとする子を目指す。

我が国の国土と歴史に対する理解と愛情については、社会生活と同様に、地域社会や我が国の国土の地理的環境、産業の様子及び先人の働きなどについて学ぶことを通して深める子を目指す。

社会的な見方や考え方を養うとともに、体験的・問題解決的な学習を一層重視しながら、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培いたい。よりよい社会の形成に参画するには、問題解決への意欲を高め、多角的なもの見方・考え方を養う、考えることが重要なのである。

よって、社会科における「考える子」を次のようにとらえる。

体験的・問題解決的な学習を通して 問題解決への意欲を高め 多角的なもの見方・考え方を養いながら 地域社会や我が国の国土・産業・歴史などに対する理解と愛情を育み よりよい社会の形勢に参画しようとする子

2 問いがつながる社会科の授業

子どもはその社会的事象について気付きを発する時、知らなかった事実を発見した喜びの感情や、疑問を感じ困惑した感情と共に語る。前者の感情の場合、友達によって納得や理解が示されることで自分の気付きに自信を深め、もっと多くの気付きを得ようと次の活動に意欲を高めることが予想される。後者の感情の場合、過去の学習で得た知識とは異なる事象に、違和感を得ていると考えられる。その違和感が気付きに「どうして」などの疑問を示す言葉を付け加えて話させ、子ども全体に疑問や違和感を共有させる。そして集団で事象の根拠を探ったり、関係する他の事象を調べたりする。これらの活動によって、数多くの具体的事実が関連する事実としてつながれ、課題に対して多くの根拠からなる説得力のあるまとめ作りや、具体的な事実から見えない大きな目的を見出したりすることにつながる。このような学習を、集団での学びに達成感を感じさせる問いがつながる授業ととらえる。

3 「問いがつながる授業」への手だて

(1) 事象が表すメリット・デメリットを明確にさせる

授業で提示される社会的事象から得る気付きは、子どもの体験や資料から読み取った根拠と共に話される。それについて、常にメリット・デメリットを考えて話すことにより考えの相違が生まれ、お互いの判断に疑問をもったり、相手の真意を問うたりする。判断に疑問をもった場合には新たな根拠を示して自分の考えや判断を話し、理解できなかった場合には繰り返し説明を求める。集団が疑問を生み出すことが意欲的に学ぶ集団にしていくと考える。

(2) 事象が人や社会に与える影響を示す

事象はそれに関わる人々のくらしや願いを共に語られることで、自らの生活にもつながりが深いものとしてとらえられる。自らの体験に転嫁させて考えたり、複数の具体的事実を包含する抽象度の高い言葉で事象をとらえたりすることで、多くの子どもに気付きを出しやすくする。その気付きに子ども相互の考えの違いがあったり、共通の思いが含まれたりすることで、質問したり自分の考えを付け加えたりしようとし、子どもの考えがつながっていく。

4 実践例

(1) 事象が表すメリット・デメリットを明確にさせる

「日本のお米づくりは、どうなっているの」の実践

単元の中盤米づくりの方法や工夫について学習する場面で、教科書などの資料とは異なる事実を提示した。その矛盾が疑問の感情を引き起こし、再び資料に目を向けさせ、「どうして教科書のように田植えをしているのだろうか。」などと事実で隠れた理由を考えさせようとした。そして、その考えを学級全体で出し合うことにより、教科書の事実の工夫について「だから・・・なんだ。」などと、より深い納得の意識と共に感じられるように企図した。

本時は、米づくりの1年の学習を知る学習である。子どもがもつ資料は教科書、資料集、いしかわの農業の三つである。子どもに「どうして」を感じさせる資料は、輪島市の千枚田で種もみを直まきしている様子を知らせる新聞記事である。教科書などでは、ビニルハウスで種もみを10cm程度の苗になるまで育て、その苗を機械で植えることが載っている。子どものうち数人は田に手で苗を植えた経験があったが、種もみを植えることはしていなかった。また田仕事の経験がない子どもにとっては直前の学習と異なる事実が提示されるので、どちらの子どもに対しても違和感をもたらすと考えた。その違和感が、資料に再び目を向けさせ、種もみを直接田にまくことが伝統的な手法であること、10cm程度に育った苗だからこそ田植え機を使うことができ、広範囲の田に短時間で植えることができることに気づいてほしいと考えた。

授業後半での話し合いでは新聞記事の提示によって、想定した違和感が子どもの間に広まり、それまでに調べていた教科書などの資料に再び目を向ける姿が多く見られた(資料1)。

そして、実際には多く行われている苗を育ててから、機械(田植え機)で植えることのメリットについて考え始めた。D児が考えたことは、実体験を含めた言葉だと考えられる。D児には、田植えの経験がなかったが、他の植物の栽培経験がある。そこでの経験から、発芽した稲が鳥などの動物に食べられることがないことをビニルハウスのメリットだと考えている。E児は、健康な稲を育てるにときに、適切な温度管理が必要で、そのためにビニルハウスが役立つと考えている。E児の発言に関連することは資料にあるのだが、直まきとの比較をすることで、ビニルハウスの利点・工夫について考えられたと考える。

F児以降の発言では、より現実に即した話し合いが行われている。最近では、植える苗を自分たちで作らず、JAなどで購入する農家も多いと聞く。それをF児が話すと、それについてG児やA児がさらに疑問を投げかけている。ただし、これについてはこの授業の中で解決することはできなかったため、また調べてみようとして、話し合いを終了した。

この後、実際に多くの農家で行われている田植え機を使った田植えについてまとめた。根拠としたのは、今も田植えをする方に聞いた話で、それを授業者である私から

- T : この新聞記事は、種もみを投げていることが書かれているね。これって、どうして?
- A児: 種を投げたら、バーっと生えるから。
- B児: 種、投げるの?
- T : あなたたちが調べたのは?
- A児: ビニルハウスで苗を作ってから、植えていた。
- T : それは、どうして?
- C児: 丈夫になるから。
- T : ビニルハウスは?
- D児: ビニルハウスは、鳥とかが来なくて安全。邪魔がこないから。
- E児: ビニルハウスは、温度とかを調節しながら育てられるから。
- T : 田植えしたことがある人は、どうしてか聞いたことない?
- F児: おじいちゃんは種を植えるのでも、自分で育てるのでもなく、育てたのを買ってくる。
- G児: 売るために育てているの?
- A児: 温度管理で、いい苗ができるから?

資料1 苗を植えるのと 種もみを直にまくことについての話し合い

話をした。田植え機という機械で田植えができることが最大のメリットとなり、田植えにかかる時間・労力の軽減につながっていることを話した。そのためには、田植え機で植えられるように苗が育っていることが必要であり、そのためにも苗を育てているとまとめた。直まきをすると種もみが固まって芽を出し始めるため、発芽率がよくなかったり、稲が等間隔に育たなかったりすることがあるとも説明した。

この授業では、資料を読むとわかる農家の工夫に加えて、機械化されている米づくりについて理解を深めることができた。資料とは異なる事実を提示し、それがどういう根拠に基づいているのか、どんなメリットがあるのかを考えさせた。その話し合いの中で、「機械を使っているんだ。」と納得するのではなく、「それはどうしてだろう？」と考える時間をもつことができた。今回その考える時間では、メリットを中心に考えたことで、より深い事実認識に至ることができたのではないかと考える。

(2) 事象が人や社会に与える影響を示す

「ふだん食べている食料は、どこからくるの」の実践

いくつかの実践を経る中で、子どもが課題に対してお互いに問いを出し合い、そこに含まれる根拠や判断について考えを表すことで、複数の視点から考えをもてるようになると考えた。ただこの時、学習したことに対してある程度の理解が必要であり、同時に話題としている事実や状況について興味や関心をもてるのが大切であるとも考えた。そのため、この実践では、既習の国内の食料生産についての理解だけでなく、輸入が欠かせなくなっている食料事情への理解をさせ、その後に食料自給率を切り口として授業を行った。学習問題は「安心して食べていくために 私たちにできることはあるか。」とした。先の、輸入が欠かせなくなっている食料事情というのには、既習の農業や水産業などを職業とする人々が減ったことなどいくつかの原因があることや、店頭に並ぶ食料品の数を維持するには輸入に頼る割合が大きいことを包括的に考えることを期待した。

資料2からは子どもの話し合いが大きく三つに分けられることがわかる。最初のA児からC

A児：地元で取れた野菜を地元で食べればいい。
B児：牛肉・小麦・しいたけは、外国産が多い。
C児：その資料は、輸入相手国を示したグラフだから、今の話とは関係ない。
D児：QRコードを読み取ると生産者がわかるから安心できる。
E児：トレーサビリティというので、どこで作られたかわかるのも安心できる。
F児：できるだけ国産のを食べるのがいい。
G児：外国のものには、遺伝子組み換えの食品もある。それには、おいしくて病気に強いものもある。
H児：日本の農業をする人が減っているから、輸入しないと食べていけないじゃない？
I児：漁業をする人が減ったのは、魚をとりすぎたから？

資料2 安心して食べるために自分たちができることを考えた話し合い

児の発言は問題にある「私たちにできること」について生活経験も含めて自分の目線で問題をとらえていることである。ここでは子どもから問いが発せられることなく、数多くの考えを出し、多くの事実から問題について自分なりの答えを導き出そうとしている。この授業に限らず、内容を知る問題の学習では、このように拡散的に事実を出し合う様子が見られる。その後に、複数回出てきた用語などに目を向け、共通性などを見出してまとめていく授業も多い。ちなみに、今回はB児の考えは次に話したC児によって解釈の間違いを訂正されていて、相手の考えをその意図を正しく理解しながら聞こうとしている姿勢から出た発言だと考える。

半ばのD児からF児の発言は、資料にあった食品の安全性を知りたいと願う情報の提供を生産者が行っている事実を述べている。これは最初の部分と同じように自分（消費者）目線での話し合いであ

るが、同時に消費者の希望に応える生産者の立場の取り組みとも言える。

ここで、問題を解決のために考える立場が二つ出てきたことを受け、後半部分の話し合いに移行している。G児の発言は、米づくりでの学習でも学んだ生産者の側の工夫である。その工夫の結果、安定して私たちの食卓に食品が提供される。しかし、これはその前のF児の発言とは矛盾がある。ただそこに着目するのではなく、輸入することに向けてH児、I児の発言のように日本のこれからの食料生産がどうなっていくかについて話し合いが進んでいった。

現実に子どもは消費者であるが、生産者ではない。そのため、子どもが語る内容は消費者の立場からのものがほとんどである。それは想定していたことなのでよいのだが、授業を進めるにしたがって、消費者の側から見た生産・生産者への希望というテーマで話し合いをさせてもよかったと感じている。これは実践後に考えたことだが、今回のように子どもが自分たちの食生活にかかわって包括的に考える機会をもつことで、それまでの学習を網羅しつつ、これからの自分達の生活に考えることができた。G児のようにこれまではなかった遺伝子組み換えの食品に対して、よい工夫ととらえた発言もあった。遺伝子組み換え食品についての学習はしていないのでそれ以上話は広がらなかったが、これが品種改良の話など工夫の観点の話であればG児の発言に対して別の子どもの発言がつながっていったと考える。そう考えると、お互いの言っていることが正しく理解されることが大切であると気付かされ、話し合いの進み具合に支障がでないようであればその時点で用語の解説をいれていくことも大切だったと考える。その場合は、子どもが自分たちで主体的に進める話し合いの腰を折ってしまうとも考えられるので、そのような理解しづらい用語が出たときにどうするかという学級での授業ルールを準備しておくことも必要だと考えた。

子どものまとめには、授業中に輸入がされなくなった場合の食生活の変化予想や食の安全性について触れられていた(資料3)。学習を経て、より多くの視点から事実をとらえられるようになったと考える。

まとめ

安心して食べていくために、
国内のものでもできるだけ食べる。
日本は輸入量が多いから、
その分、ている国と、競争にな
ったりした時を考えると、もっと
生産量をふやしていけないといけ
ない。外国は薬を使っているかも
しれないし、どのように、どのよ
うなかんきょうでつくっているか
分からないから怖い。
農家の人を支えていかなければ
ならない。

資料3 自国と外国とのかかわりや 外国の食品生産の
詳細が見えにくいことにもふれた子どものまとめ

5 今後に向けて

子どもは学習する中で、様々なことに気付く。そして、学習をくり返すことで気付きを増やしたり、一つの気付きから多くのことを見出したりすることができるようになる。それによって、社会全体の様子を正しく、且つ詳しくとらえられるようになる。学習で積極的に問いを發し、その疑問を集団で解決しようとする取り組みにより、短時間に多くの気付きを得ることができた。また、同時に集団で話し合いより深い認識を得ることもできた。子ども同士が学習に満足しつつ、社会認識を深め進んで自分ができる社会参画を成し遂げていこうと態度を養うのに、集団で問いを發し合う話し合いは効果が高いと感じた。

一方で、新たな事実を知ったり、事実認識を深めたりする学習内容では、問いが生まれにくいことが感じられた。そのような学習では「納得した」という言葉で学習を終えてしまう傾向がみられたからである。「そこにはどんな理由があるのだろう」「今日の学習で得たこと相互の事実には、どんな関係性があるのだろう」などと常に問いをもつには、学習で得た知識を整理し、全体像をつかむことが必要であると感じた。どの子どもも数々の事実を関連付けて全体像をノート上にまとめられるようになることで、よりよい話し合いができるようになっていくと考える。その様子を継続して見ていく。